

梶山千鶴子論 - - 横光利一・多田裕計を視座として - - 芸術観光学の理論と実践?

著者	平居 謙
雑誌名	平安女学院大学研究年報
号	19
ページ	75-84
発行年	2019-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1475/00002395/

芸術観光学の理論と実践①

梶山千鶴子論

— 横光利一・多田裕計を視座として —

平居 謙

要 旨

梶山千鶴子の師事したのは芥川賞作家・多田裕計であった。その多田裕計は、若いころから作家・横光利一に師事。洒脱で明るい「モダン俳句」の要素が横光利一から多田裕計を経由して梶山に伝えられた。横光利一の「モダン俳句」は情感を意識的にシャットアウトした形で制作されている。多田裕計の「モダン俳句」も同様である。多田は一方で「社会性俳句」の中において多くの人の「共感」を得られやすい社会的題材を詠う。多田の中では異なる方向のものとして「モダン俳句」と「社会性俳句」は存在していた。梶山千鶴子は、これらの2つを彼女の中で昇華し、独自の形でバランスよく融合させた。この点が彼女の俳句創作上における最も偉大な業績である。筆者にとって最後の梶山千鶴子研究として本稿を書いた。

〔キーワード〕 俳句、横光利一、多田裕計

はじめに

筆者自身これまでにいくつかの場所で論じてきたように¹⁾、梶山は京都に生まれ育ち、俳句結社「きりん」主宰者として多くの弟子を指導してきた。現在句壇的に高い評価を得ているわけではないが、特に海外詠に関しては注目に値する存在である。また、その海外詠の手法と不即不離の関係にあるのが「洒脱で明るい雰囲気」(本稿ではこれを「モダン俳句」と称する)を有する彼女の俳句の特徴である。本稿では、梶山千鶴子(1925-2013)の作品を師・多田裕計(1913-1980)、師の師・横光利一(1898-1947)の作品と比較する形で鑑賞し、梶山千鶴子に関する評価の基準線を示したいと考える。全体を「横光利一」「多田裕計」そして「梶山千鶴子」の項目に分けて作品を分析・考察し、彼女の俳句の源泉を探ろうとする。まずは、「師の師」に相当する横光利一の俳句世界について以下第1節で確認する。

1 横光利一の俳句世界

作家横光利一は「文藝時代」に拠る新感覚派の作家として、川端康成とともに知られている。特に『頭ならびに腹』の冒頭「真昼である。特別急行列車は満員のまま全速力で馳けていた。沿線の小駅は石のやうに黙殺された」は表現革命として大いに注目を集めた。

多田裕計は「私の俳歴」(『草萌えにシヨパンの雨滴打ち来たる』²⁾)に次のように書いている。

しかし、僕には別に、俳歴などありません。ただ、昭和十年から十一年にかけて、小説の師であった横光さんの十日会俳句にはずっと出ました。…(略)…以後、波郷さんのすすめで二、三の俳句感想など書きました。それがそもそもの初まりです。

横光利一は1946年12月30日4時13分に逝去しているが、丁度その時刻それとは知らずに多田は以下のような句を作っていたと言う。

吹雪やんで月の嵐かいねがたし

この句の心は以下のようなことであろう。「吹雪が止んだ。静かな外の世界が戻ってきた。本来であつたなら安らかに眠りにつけるはずだけれども、月光が冴え冴えとして眠ることができない。何物かが呼んでいるかのように心がざわざわする。」師の逝去とこの句を結び付けて考える時、多田裕計の「師」横光への思いが読者の心を強く弾く。

多田は師・横光の訃報を元旦故郷の福井で知ることになる。通夜の様子を彼は次のように記す。

その夜、私は、私の「精神の父」を弔うべく、汽車に乗った。…(略)…通夜の家の中は、何の部屋も、文壇人、雑誌記者係りで充ちあふれている。孤独な心で焼香を了った。

注目をひくのは「精神の父」という表現で、それは多田裕計にとって横光が単純に俳句上の「師」ではなく、文字通り「心の師」であることを意味している。この強い「師」との結びつきは『草萌えにシヨパンの雨滴打ち来たる』に収められた「横光忌」5句にも滲み出ている。本書は、多田裕計の俳人論・エッセイ・句作品など併せ収めた書籍である。以下に引用する。

師の墓へ影し捧ぐや冬堇
翳打つは鶉か厳し墓厳し
昼の月淡き枯野に墓柔さし

冬ざれに洗ふや乾く師の墓は
冬麗の墓より微笑沸くごとし

同書に、多田裕計による横光制作時期分類も収められている。一般には横光の華々しい文壇デビューの時期は「新感覚派時代」という形で特筆するものが多い。それに対して多田の時期区分はかなりユニークで①「機械」時代 ②「純粹小説論」時代 ③「外遊、旅愁」時代 という分類である。

(1)「機械」時代

個の追求分析時代。「場の哲学」に立つ近代作家であり「現象心理」を打ち出した思索作家として位置する。「時計」「寝園」は実験作品の宝玉。

(2)「純粹小説論」時代

古典文学にも通俗文学に通じるとも言われるこの論が実は「内面的個の外へへの連続的拡充」だとする。この時期の「紋章」「家族会議」がその実践である。

(3)「外遊、旅愁」時代

東洋的運命と西洋的運命の交錯。「旅愁」がその代表作。横光の肉体はこの難行のため音を立てて崩れたと多田裕計は位置づける。

批評史の文脈を無視した独自の分類だが、多田裕計の横光観を如実に現わしているのが次の部分であろう。

日本の近代作家の中で、これほど一貫した精神の連続的戦いを、勇敢に表現して発展生長した例があるだろうか。私たち若い世代を強く魅倒せずして置かなかった横光文学の引力は、此の近代性、思索性、観念性にあった。

「精神の連続的戦い」「勇敢に表現」「魅倒せずして置かなかった」等の評言や「近代性」「思索性」「観念性」などの評価基準の中に自然、横光観と同時に多田裕計自身の文学観がよく現れているといえる。

横光が1935年頃「十日会」という俳句会を作ったこと、それは当初は弟子達のために設けられた面会日であったこと、横光の執筆の邪魔にならないように「面会日」として始まったことなどが中田雅敏『横光利一 文学と俳句』³⁾を読むと詳細に書かれている。あたかも夏目漱石の「木曜会」や龍之介「我鬼窟面会日」といった趣である。横光利一にとっての俳句は決して手遊びでもの でなかったことは、当初雑談会として始まった「十日会」が第2回目から俳句の連座へと変わり、横光自身によって「十日会賞」という賞までが用意されたことから推測できる。

横光利一の俳句の中で随一有名なのは「蟻臺上に餓ゑて月高し」という句である。これは、蟻が台の上に登ってきているけれど、其処には運ぶような一片の餌もない。蟻が台の上で食べ物もなく餓えているという「閉塞感」が下五の「月高し」という「場所」に移されることで一挙に開放感が与えられる。その他横光利一の句は350以上残されている。以下に10句と短評を付す。全てが「モダン俳句」だと言え、新感覚派横光利一の面目躍如の趣がある。

- | | |
|-----------------|-----------------|
| ①菜の花やペタルも軽き日暮路 | ②夜桜や隣の人にあひにけり |
| ③屋上のインコ真白し夏の月 | ④傾きて崩るるとき百合の花 |
| ⑤秋半ばモンマルトルの霧を思ふ | ⑥ショパンなほ続く妹の秋の薔薇 |
| ⑦横綱と顔を洗ふや冬の宿 | ⑧オリオンを直上に指す雛祭 |
| ⑨シャンゼリゼ驢馬鈴沈む花曇 | ⑩船中に桃のみめぐる二三日 |

①の句の持つ爽やかさは横光自身の短編『春は馬車に乗って』を彷彿させる。ペタルの軽さは、主体の心の軽さでもある。②は、都市生活の孤独を早い時代に描き出した秀作。夜桜を見に行くまで気づかなかった隣の人の動向という主題は、現代人の生活感覚にもつながるだろう。その描き方はユーモラスである。③当時の日本人にとってインコを飼うことは、西洋の生活を思わせ高級な生活の象徴となっている。屋上の白いインコの淋し気な様子が月光によってより一層際立つ。④弟子・多田裕計に「死の夢に螢なだれてゐたりけり」という句が見られる。横光の描く百合の花が零れ落ちる様子が、その句に影響した可能性もある。⑤カタカナは現代俳句では珍しくないが、横光の時代には物珍しさが漂う。モンマルトルと書くだけで仏蘭西の香りが漂う。和風な俳句の雰囲気さがらりと変わる。⑥多田裕計「草萌えにショパンの雨滴打ち来たる」は洒脱だが、師・横光利一の句に典拠するものである可能性もある。⑦「冬の宿」等の純和風世界も、横光の手の中ではユーモアの種に過ぎない。洗面所で何気なく横を見ると、そこに横綱がいる、という漫画の落ちにも近い可笑しみがある。⑧洋上で作られた俳句。雛祭の壇上、遙かな大空を見ると一面に輝くの星座が広がっている。大スケールを以て描かれた世界と世界観が理解できる。「蟻臺上に餓ゑて」に通じる構造把握の独自の方法が見て取れる。⑨「花曇」という語は、快活さのない鈍い世界を読者に示す。しかし「シャンゼリゼ」「驢馬鈴」という語によって醸し出される異国情緒が最初に描かれていることで、この句は重くなり切らずに辛うじて明るさを保ちえている。⑩『欧州紀行』の文脈を外せば以下のようにも読める。航海の長い道のりで、どこかの国に寄港した折のことであろうか。大量に買い込まれた桃が乗り込んだ人々に配られ、香りが船体を蔽う。言いようもない和やかな一時を人々が過ごすのが感じられる。

横光利一の俳句は、自身の小説がそうであったように、伝統に対して挑戦的であり、かといって過剰な反抗や奇抜さによってそれを乗り越えるのではなく、洒脱で明るく繊細な色彩と、ある時には大胆な飛躍によって革新性を実現しているといえることができる。

2 多田裕計の俳句世界

本節では、多田裕計の俳句世界を見るが、それに先立って『多田裕計句集』⁴⁾末尾「多田裕計略年譜」に基づいて多田の生涯を確認する。

福井県福井市に1913年多田裕計は生まれている。弟子の梶山千鶴子は1925年生まれであり、12歳の年齢差だが師弟としてはむしろ年齢差は小さいと言える。1936年早稲田大学フランス文学科卒。学生時代から横光利一に師事している。横光俳句会で石田破郷と知る。1941年『長江デルタ』により芥川賞を受賞。1945年、故郷福井に疎開中、戦災により家を喪失した。3年後の1948年には福井大地震を体験する。1949年神奈川県逗子海岸に移住。1954年「鶴」同人として俳句生活を開始。1957年句文集『ショパンの雨滴うち来る』を近藤書店より刊行。1962年俳句文芸誌「れもん」創刊。俳句新風運動を興す。梶山千鶴子が1965年に入会する。1974年自選句集『浪漫集』刊行。1980年死去。

弟子であった梶山千鶴子の中にも、多田裕計が横光を「精神の父」と見做したのと同様の発想が受け継がれていた。梶山最晩年に書かれた「多田裕計論2 神馬の嘶き ― 普段の心で遊ぶ」⁵⁾には以下のようにある。

一人暮しになってから久しい。猫も来ない狭庭には一日中蹲踞の水が刻をきざんでいる。両親はじめ家族との別れは言うまでもないが人生の中で一番悲しかった事は師匠との永遠の別れであった。

師匠と言っても数々の師にお世話になり、その上一人娘の世間知らずで周囲の人々の愛に支えられての日々だったが、次々と両親も亡くなり心にぽっかりと穴の空いた日々だった。そんな私に俳句という一行の詩によって親にも優る師が現れたのだ。(冒頭部 10頁)

師・多田が「師の師」横光利一に対して使った「精神の父」という言葉を超えたレベルとも捉えられる「親にも優る師」という表現で梶山は師への思いを語る。また彼女は以下のようにも書いている。

多田先生の浪漫主義俳句についての論はむつかしく、その真髄に触れることは不可能だが、理解できるだけの私の貧しい智識によってその一端に触れてみると、師の詩に対する心は、表現の風物の描写にとどまらず、その物や事についての内面の真意を心で得ることである。それは宗教的な概念だけではなく、心理的な大愛・恵みから生まれてくるのだと思う。(11頁)

ここにも「大愛・恵み」と言った師との全人的な関係性を意識した言葉が表れてきている。前号でも述べた多田裕計と梶山との文学上の関わりは、まさに横光利一と多田との関係性に相似するものであった。

ここで多田裕計の句を、『ショパンの雨滴うち来る』より前節に倣って10句引用する。同書は多田裕計の最も初期の句集であり、必ずしもその全貌を示すものではないが、そのことが却って多田の多田らしさを如実に語っていると考えられるからである。⑪から⑮がモダン俳句、⑯から⑲が社会性俳句、⑳は伝統俳句に領域的には属するだろう。

⑪恋のヨット雷雲蔽ひても沖へ

⑬ボッチチエリの画集愛しむ春隣

⑮ダリア旺ん窓辺隠れに聖家族

⑫草萌えにショパンの雨滴打ち来たる

⑭春の松並トルコマーチのように海へ

「浦上天主堂」より

⑯爆心の丘に蟬たぎるとき翳る

⑰夏雲や聖玻璃片を草に踏み

「福井地震」

⑱地階の百合ゆれて近づくメーデー歌

⑲緑野割れ屋根割れ人の肉も割れ

⑳たわみゆく鶴の行方は秋の海

⑪の句は、梶山千鶴子の『國境』最初の方に収められた句に「愛に似し寂しきヨット沖へ去る」という句がある。梶山がどの程度意識したかは不明であるが、師である多田裕計にこういった先行句が存在していることを念頭に置くと、「返句」のような意識で作られた可能性も否定できない。「俳句における師系の問題 — 梶山千鶴子と師・多田裕計」⁶⁾に筆者は以下のように書いた。

(全句集という、多くの人の注目が集まる本の年譜に)「夫の入院の年に師・裕計との度重なる吟行に赴く」という情報を開示するという行為の中に、ある種の覚悟や大胆なメッセージを読み取ることも不可能ではない。

ある種のメッセージという言い方をしたのは、それ以上の証拠がないからに過ぎない。誤解を恐れずに書けば可能性として、師弟の間に男女の炎が存在するということだ。「恋のヨット」の句をかつて公開した師に対して、第1句集において「愛に似し寂しきヨット」を歌う行為は大胆である。しかし、ここでもっとも注目すべきことは、あるいはそのようなやり取りから邪推し得るような愛憎劇が含まれていたとしても、表現として限りなく美しく洒脱であるという一点である。さらには、それが師の師・横光利一から師・多田裕計を経由して梶山に届けられた伝家の宝刀ともいえる手法であるという事柄である。この句からは、雷雲が空を覆ってさえ沖へ乗り出すヨットが渡る海面に、梶山の第1句集『国境』冒頭におかれた多田裕計の賛の中の言葉「カットグラス」のように恋の情熱がきらきらと輝いているのが感受しえる。⑫「草萌え」は、ショパンの曲の優しい調べと雨滴をビジュアル的に重ね合わせたところに成立する非常に美しい作品である。⑬「ボツチチエリ」の句も⑮「聖家族」の句も「優しさ」と「健康さ」とを兼ね合わせている。⑭「春の松並」は一見無関係に見えるトルコマーチと松並とを大胆に連結させたところに斬新さが見える。多田裕計は、梶山の第1句集『國境』冒頭の賛において彼女の作品に対し「カット・グラス」「明快」「簡潔」「健康」「月よりも青空の日輪のほうが、更に適切」等の評言を与えた。しかしそれらの言葉は、梶山に与えるものであったと同時にまた、多田裕計自身の句の理想を突いた語に他ならなかったことが、多田の作品群を読むとよく理解できる。師・横光利一から引き継いだ「モダン俳句」の技法が冴えわたっている。

ここまでの句が、いわゆる横光利一由来の洒脱な「モダン俳句」だとすれば、以下の⑯-⑲には、1957年の時点で多田裕計が非常に重点をおいていた「社会性俳句」に相当する作品群である。⑯「爆心の丘」は「翳る」の一語が重要である。原爆投下の瞬間が、普段通りの夏の、ふとした太陽の翳りに二重写しされる。日常と全き非日常の接点としての8月9日。⑰「夏雲」句は、原爆投下によってステンドグラスが飛散し破片を踏む感触が読者の皮膚に傷みを伝える。⑱「地階の百合」は、「メーデー」が題材であるが、梶山千鶴子第1句集『國境』⁷⁾にも、頭から2句目に「メーデーの旗先に触れ葉の揺るる」という句がある。こういう配慮は師に対する敬意そのもののようと思われる。⑲の「福井地震」の句は、自然災害句として十分に鑑賞に堪え得る。震災によって荒れ果てたふるさとに無言で佇む俳人の姿が痛々しい。最後の⑳はむしろ題材的には俳句の王道に属するものだが、多田裕計のなかでは月並みの域を出ない。

多田裕計の句は、第一に師・横光利一から継承した洒脱で明るい斬新なモダン俳句、そして第2に師には見出すことのできない「社会性俳句」に属するものに大別される。俳句の基本路線をゆくものも存在するがそれらは注目に値しない。

3 梶山千鶴子と師

梶山の経歴については別稿で詳細にふれたので、ここでは便宜的に必要事項だけピックアップする。梶山は1925年京都生まれの京都市育ち。1946年結婚後、1962年に丸山海道主宰の「京鹿子」に入会し俳句に触れた後、1965年には多田裕計主宰の「れもん」に入会している。1972年第1句集『國境』、78年第2句集『濤の花』を上梓。80年多田裕計死去。85年第3句集『一の矢』を上梓するも、11月に夫登が死去。88年8月に主宰誌「きりん」を創刊している。老境に入っても創作意欲は衰えず第4句集『鬼は外』(90年)第5句集『一人芝居』(96年)第6句集『結』(99年)第7句集『墨流し』(06年)の4冊を刊行。その後も『牛歩』(2009年)等の合同句集に参加。2013年に全句集を上梓した。前節、前々節に倣って代表句を10句引用する。

- | | |
|-------------------|---------------------|
| ②①街騒やガラスのごとく木の芽立つ | 台湾 十三句より |
| | ②②愛に似し寂しきヨット沖へ去る |
| ②③帆立貝われに国引く力欲し | ②④水牛と歩合はせ炎天雲もなし」 |
| ②⑤霜柱黄泉から橋のかかりけり」 | ②⑥鶏小屋に灯のついてゐるクリスマス」 |
| ②⑦雨の日の別れに青きソーダ水」 | ②⑧本当のことが言へずに濁り酒」 |
| ②⑨如月の水かげろふや浮御堂 | ③⑩師を恋へば花火曼陀羅胸中に」 |

②①「街騒や」の句は、街中を新しく職に就いたばかりの女性が意気揚々と闊歩する姿を想像させる。木の芽の若々しさ、新鮮さと、ガラスに比喻された意思の確かさの対象が新鮮な感動を呼ぶ。社会性俳句に近い、女性の独り立ちの勢いを自然、感じさせながらも、観念的陥らないところに特徴がある。

②②「愛に似し」の句は、前節で既述のように、多田「恋のヨット雷雲蔽ひても沖へ」の句への、返句の可能性があると筆者は考えている。多田の句に詠われている同じ状況を、女性の側から同様に洒脱に描いている。

②③「帆立貝」の句も②①同様、女性の社会進出の句と読むことができる。帆を立てて沖をゆくヨットに準えてユーモラスに視覚イメージを準備し、それにリーダーとして立つ女性としての理想と現実を詠ったと解す。年譜によると1946年帰還将校梶山登と結婚し、57年には梶山木材店を設立している。

②④「水牛と」の句は、果物の甘い香りが漂う台湾の街を思わせる。水牛が自分と同じスピードで歩いてどこまでも来る。炎天である。空が高い。一行にして雄大な叙景詩の内容を内に湛える作。明るい色彩をイメージさせるが、台湾という社会の異国情緒を、図式的でなく示した社会性にも価値がある。

②⑤「霜柱」の句には「黄泉」などと言う語が出てきて驚かされる。現実派の梶山の句には、異界の要素というのは比較的少ない印象がある。しかしこの句は現世と異界とを繋ぐ句という趣がある。

②⑥「鶏小屋」の句は版画家・川瀬巴水の「雪庭のサンタクロース」という版画を想起させる。和風の庭園を、サンタのおじいさんがトナカイの橇にも乗らず歩いてゆく。和洋折衷の妙なのだが、どこことなくこの句にもそんな匂いがある。ばたばたと普段は煩い夜はトリ目の鳥小屋も、今夜だけは夜更かしだ。逆に七面鳥の小屋だと考えると途端にしんみりした気持ちにさせられてしまうから不思議だ。

②⑦「雨の日の」の句は、「女と別れるには雨の日がいい」という伝説を想起させる。彼女も悲しみの気分に入れて、修羅場にならないからだ。それはともかく、別れの演出、を最大限に美化した句のように思われる。作詞家・松本隆の世界にも似ている。俳句でここまで洒脱な世界を作り込めるのはやはり、横光利一 — 多田裕計の延長線上にある作者だとつくづく感じさせる。

②⑧「本当のことが言へずに」の句は、言葉遊びと逡巡のリアルな心情が、「濁り酒」の一語において見事に融合する。濁り酒を飲みながら、「ああ、やっぱりこの際、はっきり言った方がいいかな、いや、言っちゃうとまずいかな」などと今日も思い悩んでいる。心の濁りを文字通り視覚化している。

②⑨「如月の」の句は純粹に和風の句だと言う印象がある。しかし、浮御堂そのものの、通常世界から浮き上がった、湖面の上に佇む根源的に持つ非日常感覚が、この句を月並みなものから救っている。

③⑩「師を恋へば」の句。師、とは何だろう。先生、恩師、師匠、先輩、いろんな呼び名が存在し、いろんな関係がそこにはある。その中で最も素敵で過激な関係は、師を恋うという気持ちである。同時に恋われる師にも憧れを抱く。師弟関係を越えた強い想いが感じられる。

梶山の句を読むと、「横光利一の持っていたモダンな表現方法を継承した」多田裕計に師事したのだということが第3者にもよく理解できる。しかし、多くの有能な弟子がそうであるように、彼女は単に師から「継承」したに留まらず、明らかにそれを深め独自の句境を展開した。最終節4ではそのことについて確認する。

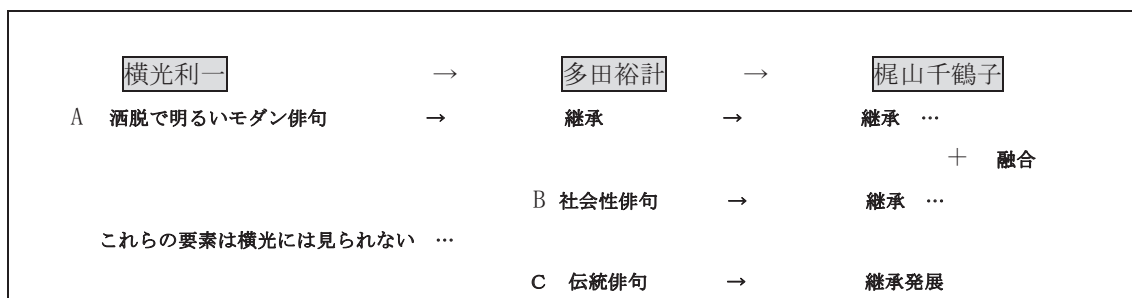
4 梶山千鶴子の中における深まり

横光利一・多田裕計・梶山千鶴子の「師系」を繋ぐ線は何か。本稿で見てきたように、横光利一の句の最大特徴は、「菜の花」や「屋上のインコ」「ショパン」「薔薇」といった、洒落た明るいモダン俳句の世界であった。横光の手に掛かると、和風で地味な俳句世界も豪華な道具を並べた魔術的舞台へと容易に変身する。そしてその弟子であった多田裕計は、師のモダン俳句という方向を基本的には継承しつつ、師には見られない「社会性俳句」の領域へも進出を強めた。その後伝統的な美への接近をやや強めるが、この領域に関しても梶山に伝わってゆく。

別稿でも分類したように⁸⁾ 梶山千鶴子の俳句世界の柱を考えると以下の3つにまとめることができる。

- A 洒脱で明るい雰囲気モダン俳句
- B 社会性を強く内包する社会性俳句
- C 日本風な色彩を沈殿させた伝統俳句

本稿で見たようにAに関しては、遠く横光利一に由来する。横光利一の洒脱な俳句が多田裕計にひきつがれ、その要素が梶山千鶴子に正しく伝わったのだと考えることができる。Bに関しては既に本稿で見たように、横光の中には全く見られない要素であった。横光 — 多田の線でいうならば線を外れる問題すなわち、多田裕計のオリジナルな領域であるということになる。梶山は直接的に多田からの社会性俳句を特に初期において引き継いだのである。Cは殆ど横光には見られないが、多田裕計は後にこの句境を深めてゆき、教えの中で梶山もそれに殉ずることになる。



ただ、ここで注目しなければならないのは、前節最後で述べた通り梶山千鶴子が「単に師から継承したに留まらず、明らかにそれを深め独自の句境を展開した」ことである。それは、横光・多田・梶山の作品を並べてみることではっきりとする。

横光利一

- | | |
|-----------------|---------------|
| ①菜の花やペタルも軽き日暮路 | ③屋上のインコ真白し夏の月 |
| ⑥ショパンなほ続く妹の秋の薔薇 | ⑧オリオンを直上に指す雛祭 |

多田裕計

- ⑪恋のヨット雷雲蔽ひても沖へ ⑫草萌えにシヨパンの雨滴打ち来たる
⑬爆心の丘に蟬たぎるとき翳る ⑭地階の百合ゆれて近づくメーデー歌

梶山千鶴子

- ⑮街騒やガラスのごとく木の芽立つ ⑯愛に似し寂しきヨット沖へ去る
⑰帆立貝われに国引く力欲し ⑱雨の日の別れに青きソーダ水

①③⑥⑧は横光の句。鑑賞は先にすでに行ったので内面・情感の描き方に限定して解説する。①はカラフルである。いい意味でトーンが一定で、最後まで明るい。一切翳が存在しない。③は逆で、淋しげなインコの陰影が、夏の月と同じ色彩を感じさせて美しい。これもトーンが一定である。⑥はシヨパンの調べに若干アクセントとしての薔薇が特徴を添えているが全体的には耽美的。⑧は雛壇の混雑したミニチュア世界が天空のオリオン座の下で相対化される。この中ではもっとも奥行きがある部類に属する。しかし、その奥行は内面に向かうものではない。横光の句の総体的印象は美の形象に意識が向かっており、内面に関してはむしろそれを消し去ろうという創作意図が強く滲んでいる。

多田裕計の作品は⑪と⑫がモダン俳句であって、その特徴は、横光のそれに一致する。シヨパンの句は、横光の⑥では薔薇がアクセントとして用いられているが、⑫では雨滴がその役割を代行する。明るさと暗鬱さという違いこそあれ、いずれも内面に入り込むための「情」の部分が意識的にシャットアウトされている。これは俳句という字数の限定されたジャンルの必然のようにも思われるが、実はそういうわけでもない。というのたとえば⑬や⑭では同じ俳句という限定された字数の中でも、読者の心が被爆者の傷やメーデーに参加しようという労働者の気持ちにある程度寄り添える形で開かれている。つまり多田の場合、内面・情感を無視しているのではなく、感情を意識的にシャットアウトするタイプの句と情感に触れるタイプの句とが大きく分裂しているのである。「モダン俳句」が前者、「社会性俳句」が後者に相当する。それでは梶山に関してはどうか。

梶山の場合⑮はきりりとした若い芽の形象という意味において横光 — 多田由来の「モダン俳句」に領域分類される。しかし、鑑賞の項目でも述べたように、そこに颯爽と街を闊歩する若い女性(これは、あくまでも作者が女性であるため便宜上女性と読むまでで、男性であっても構わない)が尖ったガラス片のように社会に切り込もうとする意気込みを感じさせるものがあり、横光や多田の句のような情感のシャットアウトが感じられない。⑯は先述のとおり多田裕計の句(⑪)との関連で読み解くことが可能な句である。多田のそれが「恋のヨット」という如くやや表現においては歌謡曲の歌詞のようにステレオタイプ気味であるのに対し、ヨット自体を「愛に似し」と形容することで心の揺れの微妙な震えを丁寧にキャッチしているという特徴がある。また、当時の男性と女性の恋愛における位置関係、あるいは師と弟子という関係を考慮すれば男師が「雷雲蔽ひても沖へ」と言いつつ意気揚々と「恋のヨット」を滑らすのに対して、女弟子は「愛に似て寂し」という心情を吐露するのだ。ここに女性自立史の問題を想起することはそれほど無理なことではないだろう。⑰も、ユーモラスな表現が同時に力強い女性リーダーの比喩として現実的な形で句を引っ張り、洒脱に過ぎるかのように見える⑱も、実は別れの日のソーダ水であるところに、その青さに限りなく近い、失恋した女性の落胆と蒼ざめた表情が描かれ、情感という面から瑞々しさを豊かに湛えている。

梶山の句は、横光利一 — 多田裕計の「モダン俳句」の継承線上にあることは表現上の特徴からも明らかである。しかし、「モダン俳句」と「情感」とが見事に融合しているという点が彼女の師・師の師とは異なっている。それは単に彼女が女性であって、感情表現に相対的に優れているというレベルをはるかに超えた、短詩系文学上の大きな達成のひとつであると考えられることができる。

あとがき

本文最後で書いた「達成」は、筆者の専心する創作分野 — 俳句ではなく現代詩なのだが — における最重要課題でもある。昭和初期以降、詩のシーンにおいて芸術派と抒情派、社会派は相いれない形でそれぞれに流れを形作ってきた。芸術派は比喩の限りを尽くし、抒情派は個人の心情に執心し、社会派は図式化に専念する。それぞれの長点が絡み合うことなく排他的になる。どの領域の作品も閉塞的で心を揺さぶる迫力がない。

このような状況の中、「詩」と「俳句」というようにジャンルは異なるものの、その融合に成功している 1 人の表現者が身近に存在しているとすれば注目せざるを得ない。それが梶山千鶴子だった。

また極めて個人的なことではあるが、最後に記しておきたい。2013 年秋に、本学教授の池田聖子氏の紹介で、筆者は俳句会「きりん」に入会した。「きりん」は本文でも述べたとおり、梶山千鶴子主宰の会である。残念ながら筆者が参加した時には既に彼女は亡くなっていたため、顔を会わせることは叶わなかったが、「先生ならこう批評されたはずだ」「先生はこう言っておられた」と遺された弟子たちが盛んに批評の場で発言するのを聞いてその影響力に思いを馳せたのであった。

やがて、すれ違った「幻の師」の全句集⁹⁾を読み、背景を少しずつ調べるということをするようになった。多田裕計という名は句集を読む中ですぐに出会って知っていたが、多田の師系を辿ってゆく中で、横光利一が出てきたのには驚いた。筆者にとって横光は、魅力にあふれた作家だったからだ。大学時代に卒論の主題にダダイスト高橋新吉とどちらにしようかと迷ったレベルの書き手だった。思わぬ再会に心躍った。末席ながら横光の師系に自分自身が連なるとは考えたこともなかった。後に心外な形でこの「きりん」を筆者は去ることになった。(この経緯は on-line Journal「月刊 新次元」第 15 号に発表した「突刊 低次元 2」に詳しい。)しかし、現在でも横光利一の師系に連なるという思いは、筆者の気持ちを「モダン俳句」の方向へと強く向ける。

梶山は 1 つの境域にとどまらず、年輪を加えるにつれて徐々に「モダン俳句」から距離を置き、俳句の主流へ近づいていったという印象がある。このプロセスも興味深いものがあるが、筆者にとっては、梶山の成し遂げた上記の達成がすべてである。これを以って梶山千鶴子研究に関しては打ち止めとしたい。最後の「梶山千鶴子研究」として本稿を書いた。

注

- 1) 梶山千鶴子論 筆者は本誌 15 号(2015 年 拙稿「芸術観光学の理論と実践⑦梶山千鶴子『國境』論——海外旅行自由化と〈重層次元革命〉」)を始め、本誌 16 号(補註 8 参照)、「日本語文化論叢 創刊号」(補註 6 参照)において梶山千鶴子論を展開。その他句詩「きりん」にも数度執筆している。
- 2) 『草萌えにシヨパンの雨滴打ち来たる』(1957 年 近藤書店刊所収)
- 3) 中田雅敏『横光利一 文学と俳句』³⁾(1997 年 勉誠社刊)
- 4) 『多田裕計句集』⁽⁴⁾1980 年 角川書店刊)
- 5) 梶山千鶴子「多田裕計論 2 神馬の嘶き — 普段の心で遊ぶ」(*「ぶるうまりん二十五号」 須藤徹 編集・発行 2013 年 3 月刊)
- 6) 「日本語文化論叢 創刊号」 (平居謙編 2018 年 8 月 芸術観光学研究所刊)
- 7) 梶山千鶴子第 1 句集『國境』 (1972 年 れもん社刊)
- 8) 「芸術観光学の理論と実践⑧ 変容する海外詠——梶山千鶴子における「社会性俳句」の問題——」参照(本誌 16 号 2016 年)
- 9) 『梶山千鶴子全句集』(2013 年 東京四季出版刊)

A Study on Chizuko Kajiyama under Yokomitsu Riichi and Yuukei Tada Theory and Practice Art Sightseeing Study^⑪

HIRAI, Ken

Chizuko Kajiyama studied under Yuukei Tada. Tada later won Akutagawa prize. From his youth, Yuukei Tada studied under Yokomitsu Riichi. Yokomitsu Riichi initiated Tada into the smart and light world of “modern haiku”.

Tada passed that on to Kajiyama. Yokomitsu Riichi produced his “modern haiku” by consciously shutting out emotions. While Yuukei Tada’s “modern haiku” was created in the same way, he left some room for people to emotionally relate to his haiku. And that’s mainly done through his “social issue haiku”. In Tada, “social issue haiku” and “modern haiku” exist in each respective literary world. Chizuko Kajiyama was the one who fused these 2 worlds. “Social issue haiku” and “modern haiku” are integrated in Kajiyama’s works. This is the greatest achievement attained by Kajiyama during the course of her creative endeavor. This paper is written as my last literary critique on Chizuko Kajiyama.

Key words: Haiku, Yokomitsu Riichi, Tada Yuukei